

完全主義と自己愛による怒り反すうへの影響

八田 純子 (愛知学院大学 心身科学部, hatta105@dpc.agu.ac.jp)

八田 武俊 (岐阜医療科学大学 保健科学部, hatta@u-gifu-ms.ac.jp)

田村 達 (岩手県立大学 社会福祉学部, t-tamura@iwate-pu.ac.jp)

The influence of perfectionism and narcissism on anger rumination

Junko Hatta (Faculty of Psychological and Physical Science, Aichi Gakuin University, Japan)

Taketoshi Hatta (Department of Medical Technology, Gifu University of Medical Science, Japan)

Toru Tamura (Faculty of Social Welfare, Iwate Prefectural University, Japan)

Abstract

The present study examined possible influences of perfectionism and narcissism on anger rumination. Ninety-five undergraduates completed the Japanese version of Anger Rumination Scale (ARS), the Multidimensional Perfectionism Cognition Inventory (MPCI), and the Narcissistic Personality Inventory-Short Version (NPI-S). Multiple regression analysis revealed that “concern over mistake” subscale of the MPCI, “need for attention and praise” and “a sense of superiority and competence” subscale of the NPI-S were predictors of anger rumination. The results showed that “a sense of superiority and competence” was a negative predictor of anger rumination as Hatta et al. (2018) has proposed. The effects of perfectionism and narcissism on anger rumination might be restrictive, so further investigation should be needed.

Key words

anger rumination, perfectionism, concern over mistakes, narcissism, need for attention and praise

1. 問題と目的

怒り感情は、多くの人が日常的に体験する (大淵・小倉, 1984) ものであるが、表出する際に、人は攻撃的な反応を示しやすく (Zillman, 1971)、相手から反発を招くこともある (木野, 2003)。したがって、一般には、怒り感情を表出したいという欲求には抑制が働き、怒り表出は制御されることが多い (大淵・小倉, 1984)。怒り感情は時間経過に伴って鎮静化する (日比野・湯川, 2004) が、他の感情より持続しやすいことや (Scherer & Wallbott, 1994)、抑圧しようとしてもかえって怒りが強まること (Wegner, Erber, & Zanakos, 1993 ; 木村, 2005) が指摘されている。

怒りの持続や増幅をもたらす認知的要因として怒り反すうが挙げられる。怒り反すうとは、怒り情動や体験に注意を向けたり、想起したり、その原因や結果について考えることで、怒りを反すうしやすい人ほど、怒りを抑制しやすいと同時に表出しやすいことから、抑圧された怒りは反すうの材料となりやすいことが指摘されている (Sukhodolsky, Golub, & Cromwell, 2001)。このことから、怒りの抑圧をもたらすパーソナリティは怒り反すうを促すため、怒りの制御を困難にさせると考えられる。そこで、本研究では怒りの抑圧をもたらすパーソナリティと怒り反すうとの関連について明らかにすることを目的とした。

本研究では、怒り反すうとの関連が想定されるパーソナリティとして、完全主義に注目した。完全主義とは完全性を過剰に追及する傾向である。完全主義者は、完

全無欠であることを希求し、現実的でないほど高い目標を持ち、失敗や挫折すること、批判されることに敏感で、それらを知覚すると過度にネガティブな反応を示す (Smith, Sherry, Chen, Saklofske, Flett, & Hewitt, 2016)。質の高い行動や成果を求めて自分に高い目標を課すことはポジティブな側面であるが (Hamachek, 1978)、失敗することに過剰な懸念を示し、一定の結果を得ても自己評価が低く、満足できなかつたりすることは、不適応的な問題と結びつくためネガティブな側面といえる (Ruggiero, Levi, Ciuna, & Sassaroli, 2003)。完全主義と怒りとの関連について実証的に検討した研究は数少ないが、Besharat & Shahidi (2010) は、完全主義者の懲罰的な自己評価や自己批判的な考え方は、自己信頼の低下やネガティブな思考の永続化を招くこと、また、それ自体がストレスとなって負の感情を生み出しやすいことから、怒り反すうを喚起しやすいと考察している。

完全主義者に見られる過剰な達成欲求は、否定的な評価や失敗を避けたいという気持ちによって動機づけられている (Hamachek, 1978) ため、高すぎる目標の達成は困難であるにもかかわらず、完全主義者は実際に達成できなかった事実や欲求不満を抱いたり、自らに失望したりする機会を多く体験すると考えられる。Berkowitz (1989) の欲求不満説によれば、欲求不満は怒りを喚起させるひとつの要因であり、完全主義傾向が高い人においては、怒りを体験しやすいだろう。

達成が困難なほど過度に高い目標を抱くことで欲求不満が生じやすい完全主義傾向は、怒りを喚起させるだけでなく、怒り反すうを促すパーソナリティ要因であると考えられる。反すうは目標と現実の不一致を知覚することで生じやすく (Martin & Tesser, 1996)、完全主義傾向

が高い人は過度に高い目標をもつがゆえに達成できないという現実を体験しやすいことから、欲求不満による怒りを反すうしやすいと考えられる。さらに達成が困難な目標を持つ完全主義者は、その目標に注意を向け、固執しやすいため、達成できなかったことに関する思考にとられやすく、何とかなかったかもしれないという反実仮想的思考にも及ぶことが論じられている (Flett, Hewitt, Blankstein, & Gray, 1998)。怒り反すうにおいても現実には起きていない報復や攻撃行動に関する思考や空想といった反実仮想的思考に駆られやすいとされており、これらのことから、過度に高い目標を設定するがゆえに目標達成が困難となりやすい完全主義者は、理想と現実の不一致を知覚しやすく、欲求不満を感じることによって怒りを反すうしやすいと考えられる。

一般的に、露骨に怒りを表出することは他者に与える印象が良くないことから (木野, 2000)、怒りを感じても、むやみやたらに表出するよりは抑制する方が質の高い行動であるといえる。とくに、否定的な評価や失敗を避けたいという気持ちによって動機づけられ、自らに完全性を求める完全主義者であれば、なおさら怒りを抑制しようと努めると思われる。齋藤・今野・沢崎 (2009) は、完全主義における自らは完全でありたいとする欲求や、完全主義の不適応的側面でありミスや失敗を過度に気にする「失敗過敏」が、怒り表出の抑制と有意な正の相関関係にあることを示している。また、これまでに、抑圧された怒りは反すうの原料となりやすいことが指摘されており (Sukhodolsky et al., 2001)、完全主義は怒り反すうを促すが、とくにミスや失敗へのとらわれにおいて、その影響は顕著であると予想する (仮説 1)。

怒り反すうは境界性パーソナリティ障害 (Martino, Caselli, Berardi, Fiore, Marino, Menchetti, Prunetti, Ruggiero, Sasdelli, Selby, & Sassaroli, 2015) など、いくつかのパーソナリティとの関連が示されており、そのひとつに自己愛がある。自己愛とは尊大さ (誇大性) と傷つきやすさ (過敏性) によって特徴づけられるパーソナリティであり、個人によっていずれか、もしくは両方の特徴が強く現れるとされる。尊大さも傷つきやすさも、その背景には自分自身への関心の集中、自信や優越感等の自己に対する肯定的感覚、およびその肯定的感覚を維持したいという強い欲求がある (小塩, 1998)。したがって、自己愛傾向の強い者は、自分の印象を悪化させないよう怒りを抑圧しようとしたり、怒りの表出を避けようとしたりすると考えられる。

大学生を対象に調査を行った八田・八田・田村・及川 (2018) の研究では、怒り制御の困難さにおいて共通する自己愛と怒り反すうには関連があり、自己愛人格目録短縮版 (NPI-S) の下位尺度である「注目・賞賛欲求」は、怒り反すうを測定する尺度である ARS の総得点およびその下位尺度である「怒り熟考」、「怒り体験想起」得点を有意に予測することから、「注目・賞賛欲求」が強い人ほど、他者からの評価を気にして怒りを抑制しようとするのでかえって怒り反すうを招くことになり、結果的に怒り

を表出させやすくなると考察している。そこで、本研究では、怒りを抑圧しようとする自己愛特性は、怒り反すうをもたらすパーソナリティ要因であることを再検証する (仮説 2)。

自己愛における注目・賞賛欲求や完全主義が怒り反すうを促すのであれば、自己愛と完全主義の両方の特性を併せ持つ人において、怒り反すうは生じやすいと想定できる。ただし、その効果は完全主義の一部に限られると考える。自己愛における注目・賞賛欲求は過剰な賞賛を求める傾向であり、それが強い人は他者からの評価を気にしてミスや失敗を絶対に避けたいと望む。齋藤他 (2009) の研究において、自己愛における他者の評価によって肯定的な自己評価を維持しようとする評価過敏性は、完全主義におけるミスを過度に気にする失敗過敏や自分の行動に漠然とした疑いをもつ行動疑念傾向と中程度の相関関係にあり ($r = .40 \sim .44$)、完全でありたいという欲求 ($r = .21$) や自分に高い目標を課する高目標設定 ($r = .15$) よりも強い関連が示されている。

注目・賞賛欲求が高い人は一方的な怒り表出の正当性を低いと認知するため (阿部・高木, 2006)、他者からの評価を気にして怒りを抑圧しようとするのが指摘されており (八田他, 2018)、それは否定的評価やミスを避けたいと思うがゆえにミスや失敗にとられる傾向が高い人において顕著であると考えられる。本研究では、完全主義の測定に「高目標設置」、「ミスへのとらわれ」、「完全性の追求」の3下位尺度で構成される MPCCI を用いるため、注目・賞賛欲求傾向が強い人において、ミスへのとらわれ傾向が強い人は、完全性欲求や高目標設置傾向が強い人よりも怒り反すう傾向が強いと予想する (仮説 3)。

2. 方法

2.1 調査対象者と実施方法

2019年11月に大学生95名を対象に質問紙調査を実施した。不備のあった回答を除き、男性41名 (平均年齢20.46歳, $SD = 1.76$)、女性51名 (平均年齢21.31, $SD = 5.09$)、計92名分を分析対象とした。質問紙は講義中に配布し、無記名で回収した。調査用紙の表紙には、本研究への参加は強制されるものではなく、回答するか否かは個人の判断に委ねられる旨が記されており、それに同意できると回答したものだけが回答した。

2.2 質問紙の構成

質問紙には、怒り反すうを測定する ARS (八田・大淵・八田, 2013)、完全主義傾向を測定する MPCCI (小堀・丹野, 2004)、自己愛傾向を測定する NPI-S (小塩, 1998; 1999) が含まれていた。

日本語版怒り反すう尺度 (以下、ARS とする) は、17項目からなり、回答者は、“ほとんどない (1)” ~ “ほとんどいつも (4)” の4件法で回答した。ARS は、怒り体験に注意を向けやすく、そのことについて分析的に思考し続ける「怒り熟考」、類似した怒り体験の想起しやすさ

を表す「体験想起」、現実には起きていない報復や攻撃行動に関する思考や空想を表す「報復思考」の3下位尺度からなる。以下、この尺度で測定した得点を「怒り熟考」「体験想起」「報復思考」とした。

完全主義傾向の測定には、MPCI (Multidimensional Perfectionism Cognition Inventory; 小堀・丹野, 2004) を用いた。完全主義の思考傾向を測定する尺度として、Flett et al. (1998) による完全主義認知尺度 (Perfectionism Cognition Inventory: PCI) があるが、その日本語版 (林, 2001) では因子構造が異なることから、より多次元的に完全主義の思考傾向を測定するために開発されたのが MPCI である。MPCI は、自己に求める完全性について、「高目標設置」、「ミスへのとらわれ」、「完全性の追求」の3下位尺度で測定する。それぞれ5項目、計15項目について、完全主義的な思考が起こる頻度を、“全くなかった (1)” ~ “いつもあった (4)” の4件法で回答を求めた。以下、この尺度で測定した得点を「高目標設置」、「ミスへのとらわれ」、「完全性の追求」とした。

小塩 (1998; 1999) が作成した自己愛人格目録 (以下、NPI-S とする) は、他者から注目されたり賞賛されたりすることを期待する「注目・賞賛欲求」、強い自己肯定感を表す「優越感・有能感」、自ら決断し、主張する「自己主張性」の3下位尺度30項目で構成されている。回答者は、“まったくあてはまらない (1)” ~ “非常にあてはまる (5)” の5件法で回答した。以下、この尺度で測定した得点を「注目・賞賛欲求」、「優越感・有能感」、「自己主張性」とした。

3. 結果

本研究では、怒り反すうと自己愛傾向、完全主義傾向との関連を検討するため、ARS と MPCI、NPI-S の総得点と下位尺度得点を要因とする相関分析を行った (表 1)。

ARS と MPCI の関連について、MPCI の総得点ならびに下位尺度である「ミスへのとらわれ」、「完全性の追求」の得点は、ARS の総得点および3つの下位尺度すべてとの間に有意な正の相関 ($r = .33 \sim .55$) が認められた。「高

目標設置」と、ARS 総得点ならびに3下位尺度との間に関連はなかった。また、NPI-S について、NPI-S の総得点および下位尺度である「優越感・有能感」「自己主張性」は、ARS の総得点および3つの下位尺度との間に有意な相関はみとめられなかったが、「注目・賞賛欲求」得点のみ、ARS 総得点 ($r = .30$) および3つの下位尺度すべてとの間に有意な正の相関 ($r = .25 \sim .28$) が認められた。

つぎに、怒り反すうと完全主義との関連について調べるため、ARS の総合得点を基準変数とし、MPCI の下位尺度である「高目標設置」、「完全性の追求」、「ミスへのとらわれ」得点を説明変数とする重回帰分析を行った結果、表 2 に示したように「ミスへのとらわれ」に関する回帰係数のみ有意であった ($\beta = .46, p < .01$)。

表 2 : 完全主義が怒り反すうに及ぼす影響

ミスへのとらわれ	.46**
高目標設置	-.08
完全性の追求	.11
Adjusted R ²	.27**

注 : † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

怒り反すうと自己愛との関連について検討するため、ARS の総合得点を基準変数とし、NPI-S の下位尺度である「注目・賞賛欲求」、「優越感・有能感」、「自己主張性」を説明変数とする重回帰分析を行った結果、「注目・賞賛欲求 ($\beta = .43, p < .01$)」と「優越感・有能感 ($\beta = -.39, p <$

表 3 : 自己愛が怒り反すうに及ぼす影響

優越感・有能感	-.39**
注目・賞賛欲求	.43**
自己主張性	.23†
Adjusted R ²	.14**

注 : † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

表 1 : 日本語版 ARS と MPCI、NPI-S 得点に関する相関分析

	ARS	怒り熟考	体験想起	報復思考	MPCI	高目標設置	ミスへのとらわれ	完全性の追求	NPI-S	注目・賞賛欲求	優越感・有能感
怒り熟考	.92 **										
体験想起	.91 **	.75 **									
報復思考	.77 **	.56 **	.60 **								
MPCI	.42 **	.40 **	.35 **	.37 **							
高目標設置	-.05	-.08	-.03	-.04	.51 **						
ミスへのとらわれ	.53 **	.55 **	.42 **	.40 **	.76 **	.01					
完全性の追求	.40 **	.35 **	.33 **	.41 **	.87 **	.19	.67 **				
NPI-S	.19	.19	.16	.15	.18	.19	.10	.11			
注目・賞賛欲求	.30 **	.26 *	.28 **	.25 *	.33 **	.16	.27 *	.29 **	.82 **		
優越感・有能感	.01	.04	-.03	.01	-.20	.15	-.11	-.06	.88 **	.58 **	
自己主張性	.16	.15	.14	.37	.11	.16	.06	.02	.80 **	.41 **	.64 **

注 : * $p < .05$, ** $p < .01$

.01)」による回帰係数が有意であった（表3）。

仮説3について検証するため、本研究では、NPI-Sにおける「注目・賞賛欲求」とMPCIにおける「ミスへのとらわれ」得点についてセンタリングを行った後、両変数の得点の積を交互作用項とした階層的重回帰分析を行ったが、調整済み R^2 の変化量は有意でなかった（表4）。

表4：ミスへのとらわれと注目・賞賛欲求が怒り反すうに及ぼす影響

	モデル1	モデル2
ミスへのとらわれ	.49**	.49**
注目・賞賛欲求	.17†	.17†
ミスへのとらわれ×注目・賞賛欲求		.03
Adjusted R^2	.30**	.29**
ΔR^2		.00

注：† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

4. 考察

本研究では、完全主義と自己愛が怒り反すうに及ぼす影響について検討した。まず、完全主義と怒り反すうとの関連について、本研究の結果は、完全主義の総得点が怒り反すうの総得点ならびに全ての下位尺度と有意な正の相関関係にあり、さらに完全主義の下位尺度を説明変数、怒り反すうの総得点を基準変数とする重回帰分析において、「ミスへのとらわれ」のみ怒り反すうの予測因であることが示された（仮説1を支持）。完全主義傾向が高い人において、否定的な評価や失敗を回避したいと考えるほど、直情的な怒り表出することで他者から悪い印象を抱かれることを避けるため怒りを抑圧しやすく、結果的に怒りを反すうしやすくと考えられる。

一方で、「高目標設置」と「完全性の追求」は怒り反すうと関連が示されなかった。その理由として、過度に高い目標の設定と現実の不一致による欲求不満は怒り以外にもネガティブな情動を生じさせることが原因であると考えられる。先行研究において、完全主義者は懲罰的な自己評価や自己批判的な考えを抱きやすい(Besharat & Shahidi, 2010)ことや、ミス避けようと自らに高い目標を課する完全主義の次元は自己批判と正の関係にあるが他者批判とは関連がない(Hewitt & Flett, 1991)ことが示されている。それゆえ、他者に対する怒りというより、むしろ抑うつのような自己に向けられた感情が生じやすいため、他罰的な怒り反すうとの関連は示されなかったと思われる。さらに、抑うつなどの感情が生じやすとするなら、目標を達成できなかったことについて何とかなったかもしれないという反実仮想は、怒り反すうに含まれる他者への報復や攻撃行動といった内容ではないだろう。それゆえ、完全主義における高目標の設置と完全性の追求と怒り反すうとの関連は示されなかったと思われる。ただし、完全主義傾向が高く、目標達成を妨害されたという被害的な認知を持つ人であれば他罰的な怒り

反すうが促進されるかもしれない。一方で、ミスへのとらわれは、目標が達成できずに生じた感情がどのようなであっても、それを直ちに表出することで他者からネガティブな評価が下されることを恐れて、それらの感情を抑圧しようとするため反すうが生じやすくと考えられる。

つぎに、自己愛と怒り反すうとの関連について検討したところ、「注目・賞賛欲求」と「優越感・有能感」は怒り反すうの予測因であることが示され、八田他(2018)による研究結果とほぼ同様の結果が得られた(仮説2を支持)。その理由として、注目や賞賛を強く求める人は、怒りを表出した際に、それが直情的な振舞いであると見なされ、他者から否定的な評価をされることを懸念し、怒りの表出を避けやすくとされる。「優越感・有能感」については、八田他(2018)が考察しているように、優越感や有能感が高い人ほど一方的な怒り表出を正当であると認知しやすいため(阿部・高木, 2006)、怒りを抑圧しないと考えられる。それゆえ、優越感・有能感が高い人ほど、怒り反すう特性が低いと考えられる。

興味深いことは、八田他(2018)と同様に、本研究においても「優越感・有能感」因子は抑制変数である可能性が示された点である。本研究で「優越感・有能感」と怒り反すうとの相関係数は $r = .01$ と無相関に近く、当然有意でないにもかかわらず、重回帰分析における標準偏回帰係数は有意で、その値は相関係数と大きく異なる。その原因として多重共線性が生じている可能性もあるが、自己愛に関する下位尺度間の相関係数は $r = .41 \sim .64$ と極めて高いというほどではなく、VIFの値も $.15 \sim .21$ であった。それゆえ、多重共線性以外の解釈として、「優越感・有能感」は抑制変数であると考えられる。以上のことから、本研究では「注目・賞賛欲求」と怒り反すうとの関連だけでなく、「優越感・有能感」が抑制変数であることも再確認された。本研究では、自己愛と怒り反すうとの関連について、八田他(2018)の追試となるが、研究の再現性が問われる近年の傾向において、こうした検証は有意義であり、重要であると思われる。

本研究では、「ミスへのとらわれ」と「注目・賞賛欲求」との交互作用について予測したが、重回帰分析における交互作用項の効果は有意でなかった(仮説3を不支持)。今後はこれらの変数間の関連性について検討する必要がある。たとえば、本研究では、完全主義と自己愛の関連について論理的に因果関係を定められないため、媒介効果などについて検討しなかったが、完全主義と自己愛が抑うつに及ぼす影響を検討した福井(2013)の研究では、適合度指標の値が高いことから、完全主義が自己愛を介するモデルが採択されている。

今後の課題は、完全主義や自己愛について多様な側面から検討することである。本研究では、完全主義傾向を小堀・丹野(2004)が作成した「高目標設置」、「ミスへのとらわれ」、「完全性の追求」からなるMPCIによって測定したが、桜井・大谷(1997)が作成した新完全主義尺度では、「完全でありたいという欲求」、「自分に高い目標を課する傾向」、「ミスを過度に期する傾向」、「自分の

行動に漠然とした疑いをもつ傾向」の4因子構造が想定されている。齋藤他(2008)は、「ミスを過度に期する傾向」「自分の行動に漠然とした疑いをもつ傾向」がネガティブな反すう傾向や他者の敵意の知覚と正の相関関係にあることを示しており、怒り反すうとも関連すると考えられる。

また、自己愛についても、本研究では自己愛の誇大的な側面についてのみ測定するNPI-Sを用いており、自己愛の脆弱な側面については検討していなかった。しかし、Smith et al. (2016)の指摘する通り、脆弱な自己愛の側面も誇大的な側面と同様に、他者からの賞賛を得ることで、自身の完全性を周囲に印象付けようとする(他にHewitt et al., 2003)など、自己評価の調整のために他者の評価に依存しやすい(Besser & Priel, 2010)ことが示されている。さらに、他者からの肯定的な評価が十分でない場合には恥の感情を感じやすく(有光, 2001)、羞恥心を感じやすい人は怒りや敵意を見出しやすかったり(有光, 2001)、他者の意図が悪意のあるものとみなしやすかったりする(Dickinson & Pincus, 2003)。これらのことから、脆弱な自己愛の側面も、怒り反すうを促進しやすいと考えられる。今後、自己愛の脆弱な側面を測定する尺度を用いての検討も必要であろう。

謝辞

本研究は平成27～31年度科学研究費補助金(基盤研究C)(代表者:八田武俊)の助成を受けて実施された研究成果の一部である。

引用文献

- 阿部晋吾・高木修(2006). 自己愛傾向が怒り表出の正当性評価に及ぼす影響. *心理学研究*, 77, 170-176.
- 有光興記(2001). 罪悪感, 恥と精神的健康との関係健康心理学研究 健康心理学研究, 14, 24-31.
- Berkowitz, L. (1989). Frustration-aggression hypothesis: Examination and reformulation. *Psychological Bulletin*, 106, 59-73.
- Besharat, M. A. & Shahidi, S. (2010). Perfectionism, anger, and anger rumination. *International Journal of Psychology*, 45, 427-434.
- Besser, A. & Priel, B. (2010). Grandiose narcissism versus vulnerable narcissism in threatening situations. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 29, 874-902.
- Dickinson, K. A. & Pincus, A. L. (2003). Interpersonal analysis of grandiose and vulnerable narcissism. *Journal of Personality Disorders*, 17, 188-207.
- Flett, G. L., Hewitt, P. L., Blankstein, K. R., & Gray, L. (1998). Psychological distress and the frequency of perfectionistic thinking. *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 1363-1381.
- 福井義一(2013). 青年期において完全主義と自己愛が抑うつに及ぼす影響. 甲南大学紀要文学編, 163, 199-208.
- Hamachek, D. E. (1978). Psychodynamics of normal and neurotic perfectionism. *Psychology*, 15, 27-33.
- 八田武俊・大淵憲一・八田純子(2013). 日本語版怒り反すう尺度作成の試み. *応用心理学研究*, 38, 231-238.
- 八田武俊・八田純子・田村達・及川祐一(2018). 怒り反すう特性と自己愛傾向との関連. *岐阜医療科学大学紀要*, 12, 35-41.
- 林潔(2001). 抑うつ傾向と関連するTypeA行動様式および完全主義的思考傾向の構成要因の検討. *白梅学園短期大学紀要*, 37, 1-10.
- Hewitt, P. L. & Flett, G. L. (1991). Perfectionism in the self and social contexts: Conceptualization, assessment and association with psychopathology. *Journal of Personality and Social Psychology*, 60, 456-470.
- 日比野桂・湯川進太郎(2004). 怒りの経験の鎮静化過程—感情・認知・行動の時系列的変化—. *心理学研究*, 74, 521-530.
- 木村晴(2005). 抑制スタイルが抑制の逆説的效果の生起に及ぼす影響. *教育心理学研究*, 53, 230-240.
- 木野和代(2000). 日本人の怒りの表出方法とその対人的影響. *心理学研究*, 70, 494-502.
- 木野和代(2003). 怒り表出行動とその結果—怒りの表出が必要な場面に焦点を当てて—. *名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学)*, 50, 185-194.
- 小堀修・丹野義彦(2004). 完全主義の認知を多次元で測定する尺度作成の試み. *パーソナリティ研究*, 13, 34-43.
- Martin, L. L. & Tesser, A. (1996). Some ruminative thoughts. In R. S. Wyer (ed.), *Ruminative thoughts: Advances in social cognition* (Vol. 9, pp. 1-47). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Martino, F., Caselli, G., Berardi, D., Fiore, F., Marino, E., Menchetti, M., Prunetti, E., Ruggiero, G. M., Sasdelli, A., Selby, E., & Sassaroli, S. (2015). Anger rumination and aggressive behavior in borderline personality disorder. *Personality and Mental Health*, 9, 277-287.
- 大淵憲一・小倉佐知男(1984). 怒りの経験(1)—Averillの質問紙による成人と大学生の調査概況—. *犯罪心理学研究*, 22, 15-35.
- 小塩真司(1998). 自己愛傾向に関する一研究—性役割観との関連—. *名古屋大学教育学部紀要(心理学)*, 45, 45-53.
- 小塩真司(1999). 高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関連. *性格心理学研究*, 8, 1-11.
- Ruggiero, G. M., Levi, D., Ciuna, A., & Sassaroli, S. (2003). Stress situation reveals association between perfectionism and drive for thinness. *International Journal of Eating Disorders*, 34, 220-226.
- 齋藤路子・今野裕之・沢崎達夫(2009). 自己志向的完全主義の特徴—精神的不健康に関する諸特性との関連から—. *対人社会心理学研究*, 9, 91-100.
- 桜井茂男・大谷佳子(1997). “自己に求める完全主義”

- と抑うつ傾向および絶望感との関係. *心理学研究*, 68, 179-186.
- Scherer, K. R. & Wallbott, H. G. (1994). Evidence for universality and cultural variation of differential emotion response patterning. *Journal of Personality and Social Psychology*, 66, 310-328.
- Smith, M. M., Sherry, S. B., Chen, S., Saklofske, D. H., Flett, G. L., & Hewitt, P. L. (2016). Perfectionism and narcissism: A meta-analytic review. *Journal of Research in Personality*, 64, 90-101.
- Sukhodolsky, D. G., Gorub, A., & Cromwell, E. N. (2001). Development and validation of the anger rumination scale. *Personality and Individual Differences*, 31, 689-700.
- Wegner, D. M., Erber, R., & Zanakos, S. (1993). Ironic processes in the mental control of mood and mood-related thought. *Journal of Personality and Social Psychology*, 65, 1093-1104.
- Zillmann, D. (1971). Excitation transfer in communication-mediated aggressive behavior. *Journal of Experimental Social Psychology*, 7, 419-434.

(受稿：2020年10月8日 受理：2020年11月16日)